

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 4 ご挨拶



私事ながら、この5月で70歳を迎えると共に、水道ジャーナリストとしての活動歴が丸45年間になった。45年間の内訳は、水道業界紙が35年間、独立系ジャーナリストとして10年間である。69歳の昨日と70歳の今日の暮らしに変化があるわけではないが、45とか70とか、キリが良いと言われればその通りで、本人よりも周りの方が話題にしたがっている印象である。

自分自身の最近の変化は、日本設備工業新聞社のホームページに月1回のペースでこのエッセイを連載し始めたことである。ジャーナリストとして活動するに際して、会社組織にしているにも関わらずホームページを設置せず、SNSには一切関与せず、自らWebに掲載しなかった者としては、かなりの決断だった。何を大仰な、と嗤われるだろうが、その理由は不特定多数からのアクセスを避けて、水道インサイダーだけをビジネスと多少の遊びのお仲間として限定したかったからである。

水道業界紙への関わりは1972年（昭和47年）なので、そもそもの出自がグーテンベルグ以来の活版印刷に頼っていた業界紙であり、その後、紙ベースの写真植字を経て、ITへと進んだという歴史を歩んできた。その中で、アナログ紙ベースへの愛着が、メディア選択を左右していたことは否めない。更に、日本の社会全体として、そして、水道業界はなお更、形のない情報・知識に対して対価を支払わないという悪しき習慣が抜きがたく存在していた。講演会や勉強会といった時間を提供すること、せいぜい1文字何円の高額原稿料という「形」にしなければ対価の対象にならない。1つの情報が決定的な役割を果たす、ということに気付かないし理解できないのだ。若干の知識とかなりの人脈、原稿入力し続けられる体力だけを活用してジャーナリストを生業とする者にとって、Web上に情報を晒すことは、その名の通り巨大な「蜘蛛の巣」に足を踏み入れる危険なことに思えた。

しかし、Webの有効性と、日本設備工業新聞社の熱心なお勧めがあって、エッセイをスタートさせることになった。2017年2月の第1回を掲載した瞬間から反響があり、中には「拡散させてよろしいか？」というお問い合わせもいただいた。一瞬にして世界中に行き渡ってしまう、その効果たるや凄まじく、月並みながら、世の中の変化をつくづく感じた次第である。

それと同時に、紙媒体の重要性が増していることを痛感している。1つは紙媒体の情報量の多さである。Webには膨大な情報が存在しているかに見えるが、モノによっては情報量が極めて乏しいケースがかなりある。また、膨大な情報のどれが求めているものなのか、たどり着くまでが大変だ、という声も聞く。その点、専門（業界）誌・紙は、読ませたい情報をスクリーニングしているか、人の判断で作成しているわけで、情報にたどり着くと言うよりも、「そこに媒体がある」事により、いつでもアクセスできる状態にある。そして、人はPC画面に向かって作業したり検索したりすることに限界がある。本も雑誌も新聞も、無限に読み続けられる訳ではないが、PCの画面を凝視し続けた後の、骨にしみこんでくような疲労感はない。むしろ、満足感や達成感が残るのではないか。

もう1つ、紙媒体に掲載されると、人は喜ぶ。これこそが専門誌・紙の原点である。

（写真は最近の取材から、㊦ハノイに開設された日越大学：ミーディン・キャンパス、㊦すべての建物に「SONHA」製の高置タンクがある：Ba Dinh 地区。大気汚染でビルが震んでいる）